

# 大学生の環境意識実態調査

—福山大学1年生について—

伊藤 祐一

## 1. はじめに

社会では、地球温暖化の影響で最近の日本の気候がおかしいのではという声が聞こえている。環境に関する書物もたくさん出版されている。

そこで、福山大学の経済学部1年生が環境に対してどのような意識を持っているかを知るとともに、将来どうすればよいかについての知見を得ることを目的として環境意識の実態調査をした。

## 2. 調査方法

アンケート調査対象者は福山大学経済学部1年生である。調査対象者は層化無作為抽出ではなく、特定の授業科目の履修学生である。筆者と協力者が担当する1年生対象の必修科目を利用して、その受講生に対し環境省の「環境にやさしいライフスタイル実態調査」<sup>1)</sup>（以降環境省の調査と表記する）を参考にして、2009年5月にアンケートを実施した。なお、パソコンディスプレイに質問項目を表示しそれに答える方式を採用した。この方式により質問項目を印刷し答えてもらう方式よりも早く確実に処理ができた。有効回答者数は205名であった。

本調査での質問項目を下記に記す。

- 問1. 回答者の属性
- 問2. 環境に関する情報の入手方法
- 問3. 環境に関する情報への関心度

問4. 環境問題の認知度

問5. 環境問題に関する考え方

問6. 環境保全に関する知識

問7. 環境保全のための実践内容

アンケートの記入は、問1は記号記入式と記述式で、問2から問5までは記号記入式で、問6、7は記述式で行った。

### 3. 集計結果の概要(1)－回答者の属性－

問1は回答者の属性を問うものである。

有効回答者205名の属性は以下の通りである。なお( )内は%を示す。

#### (1) 性別

男性	女性
178名 (86.8)	27名 (13.2)

#### (2) 年齢別

18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	29歳
130 (63.4)	19 (9.3)	35 (17.0)	19 (9.3)	1 (0.5)	1 (0.5)

#### (3) 出身地域別

広島県	岡山県	山口県	山陰圏	四国圏	関西圏	その他	中国
150 (73.2)	15 (7.3)	5 (2.4)	7 (3.4)	14 (6.8)	3 (1.5)	8 (3.9)	3 (1.5)

## 4. 集計結果の概要(2)－環境に関する情報の入手方法－

### 4.1. 福山大学生の結果

問2は環境に関する情報の入手方法についての質問である。福山大学生の結果を図1に示す。

この図は、環境に関する情報の入手方法について、加重平均の大きい項目順に表示したものである。ここで、図の右側に記す加重平均は、「よく入手する」に2点、「ときどき入手する」に1点、「あまり入手しない」に-1点、「まったく入手しない」に-2点を与えて計算した値である。

図2は、「よく入手する」と「ときどき入手する」の比率の合計値を積極的入手率として示したものである。

環境に関する情報の入手方法について、積極的入手率が50%以上の項目

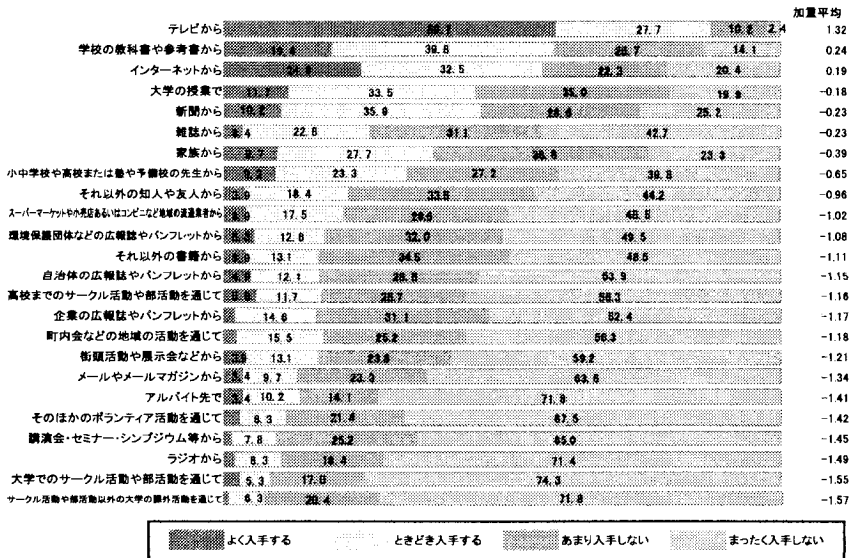


図1. 環境に関する情報の入手方法

大学生の環境意識実態調査

は「テレビから」87.4%、「学校の教科書や参考書から」59.2%、「インターネットから」57.3%である。福山大学経済学部の1年生は、視覚に訴えるテレビ、教科書・参考書、インターネットを通じて環境に関する情報をよく入手しているようである。これら媒体からの環境に関する情報の発信が非常に重要であるとする。積極的入手率が30%以上50%未満の項目は「新聞から」46.1%、「大学の授業で」45.1%、「家族から」37.6%、「小中学校や高校または塾や予備校の先生から」32.7%となっている。

これに対し、「雑誌から」26.2%、「環境保護団体などの広報誌やパンフレットから」18.0%、「自治体の広報誌やパンフレットから」17.1%、「それ（学校の教科書や参考書から）以外の書籍から」17.0%、「企業の広報誌やパンフレットから」16.5%であった。教科書や新聞以外の印刷媒体からの環境に関する

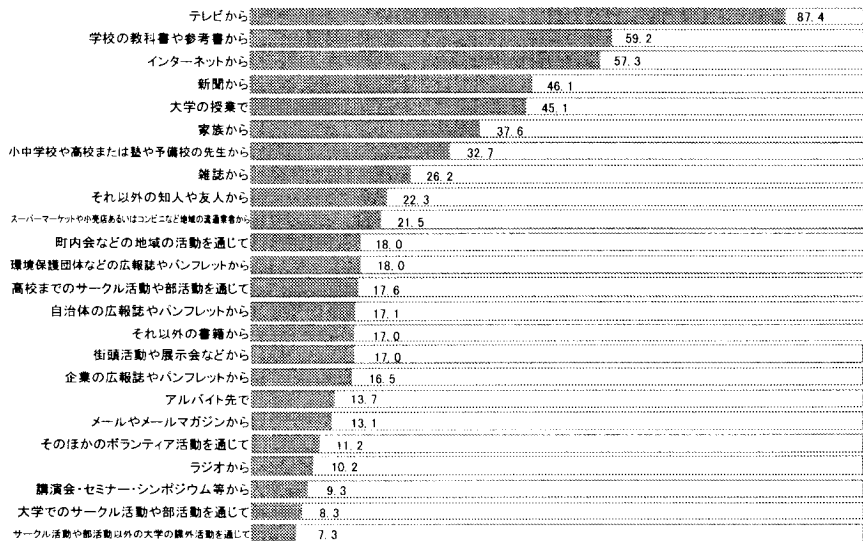


図2. 環境に関する情報の入手方法（積極的入手率）

情報の入手は多くないことが判明した。

また、情報メディアの中では「ラジオから」が10.2%と低い値を示すことから、ラジオは環境に関する情報の入手先としては利用がきわめて少ないと言うよりもラジオを聞く習慣がなくなってきたためであると考ええる。

この他、「大学でのサークル活動や部活動を通じて」8.3%、「サークル活動や部活動以外の大学の課外活動を通じて」7.3%となっており、サークル活動や課外活動を通じての環境に関する情報入手は少ないことが読み取れる。このことは、若者の人間関係が希薄になっている表れであろうと考えられる。

図3に環境に関する情報の入手方法の積極的入手率の男女別割合を示す。各項目の上の段は男性、下の段は女性の割合を示している。女性の割合が男性よりも10%以上多い項目は「町内会などの地域の活動を通じて」27.2%、「小中学校や高校または塾や予備校の先生から」22.0%、「それ（学校の教科書や参考書から）以外の書籍から」20.4%、「その他のボランティアを通じて」19.1%、「テレビから」14.2%、「スーパーマーケットや小売店あるいはコンビニなど地域の流通業者から」12.3%、「自治体の広報誌やパンフレットから」12.3%となっている。なお「インターネットから」では女性の割合が男性よりも9.8%多く、女性の方が男性よりもインターネットをよく利用していることが分かった。それに対して男性の割合が女性より多い項目は「大学の授業で」8.1%、「新聞から」5.6%、「雑誌から」2.5%、「それ以外の知人や友人から」2.0%となっている。女性は地域や先生、テレビから環境に関する情報を入手しているようであるが、男性は大学、新聞、雑誌、友人から情報を入手しているようである。

# 大学生の環境意識実態調査

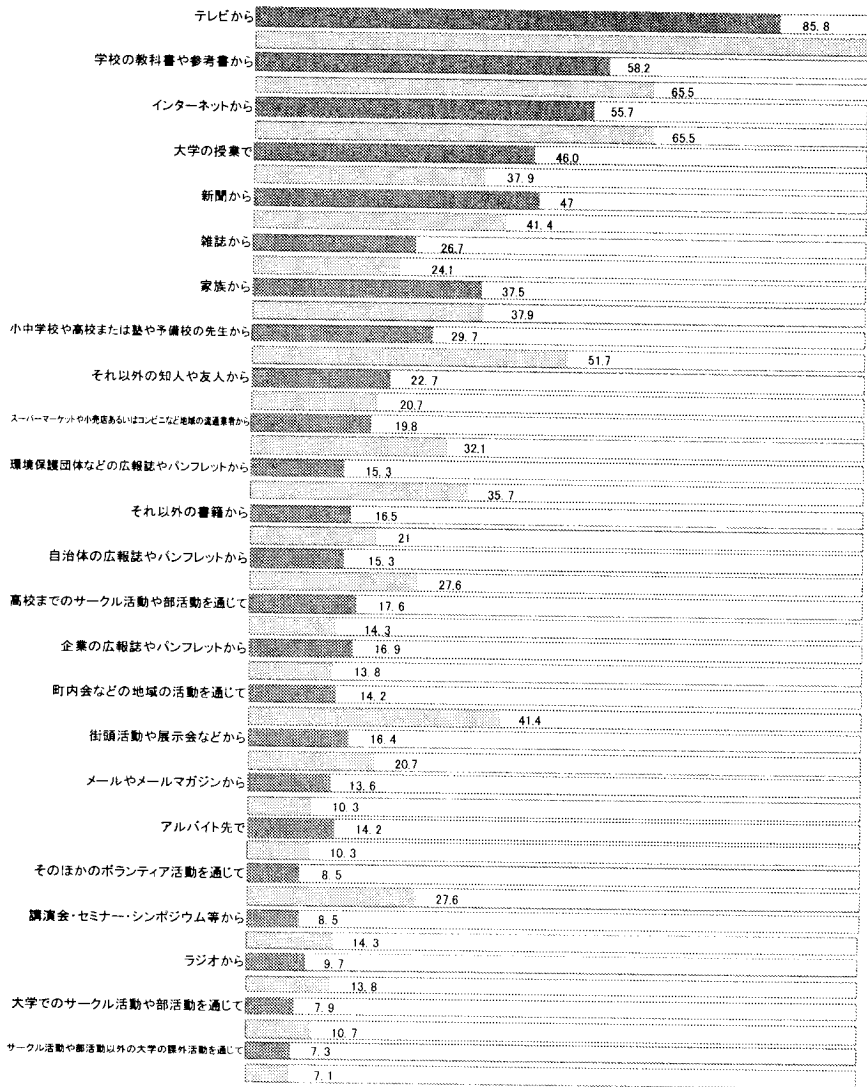


図 3. 環境に関する情報の入手方法 (積極的入手率、男女別)

## 4.2. 環境省の調査結果

図4に環境省の環境に関する情報の入手方法についての結果を示す。

環境省の調査では無回答の欄があるが、ここでは無回答の割合は無視しそれ以外の「よく入手する」「ときどき入手する」「あまり入手しない」「まったく入手しない」を基にグラフにした。また、棒グラフが表示されていない項目は、本調査に対応した項目が環境省の調査にはなかった項目である。

本調査の調査項目と環境省の調査項目が1対1で対応してないので比較はむずかしいが、本調査項目に対応する項目についての配分を図に示した。なお図の右端に順位を記しているが、これは環境省の項目の中で本調査と同じ項目の加重平均の高い順に順位を付けたものである。特に顕著な差は「イン

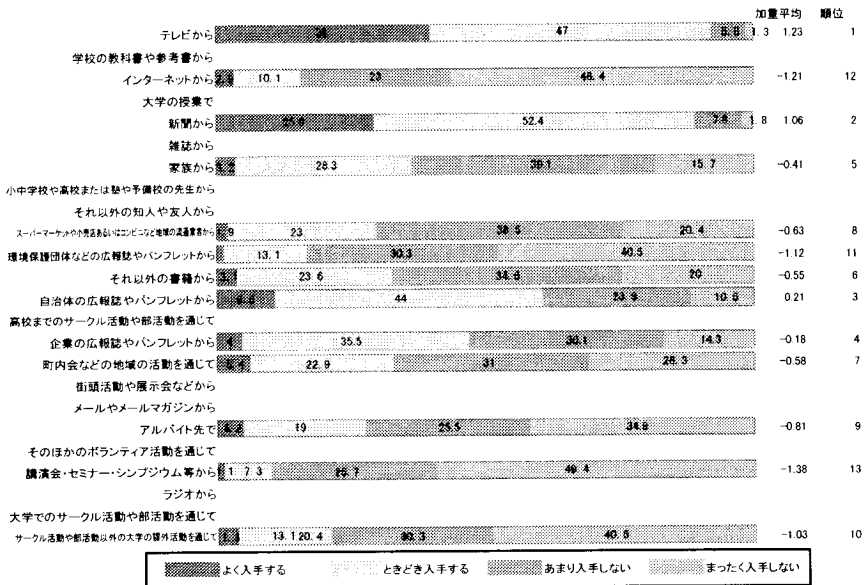


図4. 環境に関する情報の入手方法（環境省の調査）

ターネットから」である。本調査の「インターネットから」の加重平均値は 0.19、環境省の調査では -1.21 となっている。福山大学生は全国平均と比べてはるかに多くインターネットから環境に関する情報を入手していることがうかがえる。次に「自治体の広報誌やパンフレットから」の加重平均値で比べると、本調査では -1.15、環境省の調査では 0.21 となっている。福山大学生は、「自治体の広報誌やパンフレットから」環境に関する情報をあまり得ていないことがわかった。福山地区では、自治体の広報誌やパンフレットの発行自体が少ないからかもしれない。福山地区では環境に関する啓蒙活動がもっと必要であると考ええる。

## 5. 集計結果の概要(3)－環境に関する情報への関心度－

### 5.1. 福山大学生の結果

問 3 は環境に関する情報への関心度についての質問である。

図 5 は、環境に関する情報への関心度について加重平均の大きい項目順に整理したものである。

また、「大変関心がある」と「やや関心がある」の比率の合計値を環境情報への積極的関心度として図 6 に示した。環境への関心度が 70% を上回る項目は「省エネや節約に関する情報」73%、「日常生活が環境に及ぼす影響」74%、「環境問題が生活に及ぼす影響」73%である。20 項目中 14 項目が 50% を超えていることから、学生の環境に関する情報への関心が高いことがわかった。一方、積極的関心度の低い項目は「環境関係の展示会や講演会などの案内」23%、「環境問題で困った場合の自治体等の相談窓口に関する情報」26%となっている。環境関係の展示会や講演会が地方と言うこともあってあまり開催されないことと、たとえ開催されてもその周知徹底方法に問題があると考えられる。また、自治体の啓蒙活動の低調なことも原因であると考えられる。



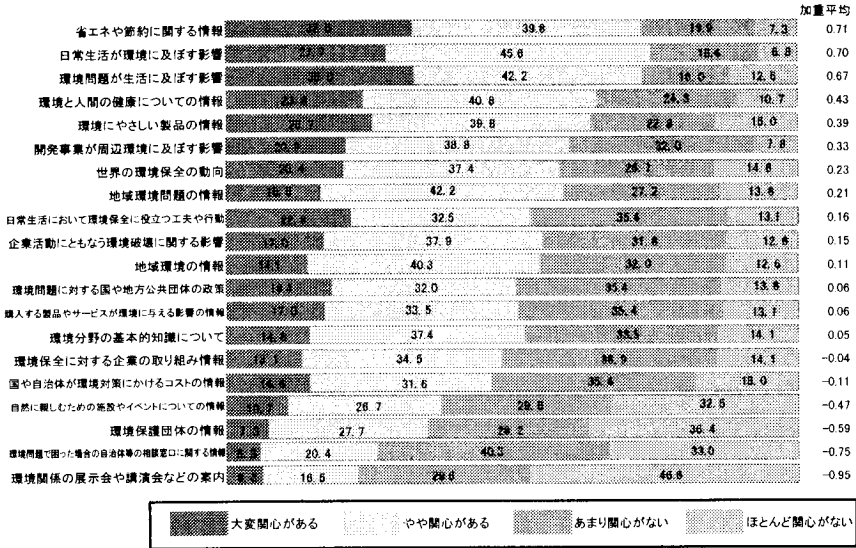


図 5. 環境に関する情報への関心度

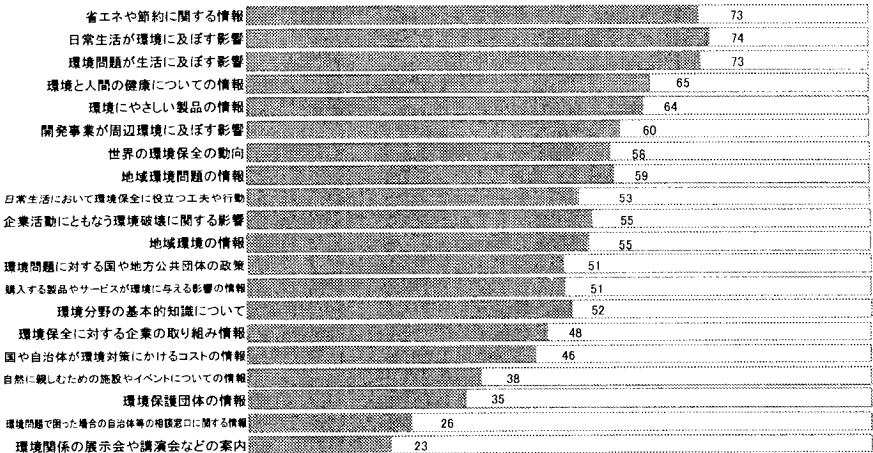


図 6. 環境に関する情報への関心度 (積極的関心度)

図7は環境に関する情報への関心度の男女別割合を整理したものである。各項目の上の段は男の、下の段は女の割合を示している。女性の割合が男性よりも10%多い項目は「地域環境の情報」26%、「地域環境問題の情報」26%、「環境にやさしい製品の情報」20%、「日常生活において環境保全に役

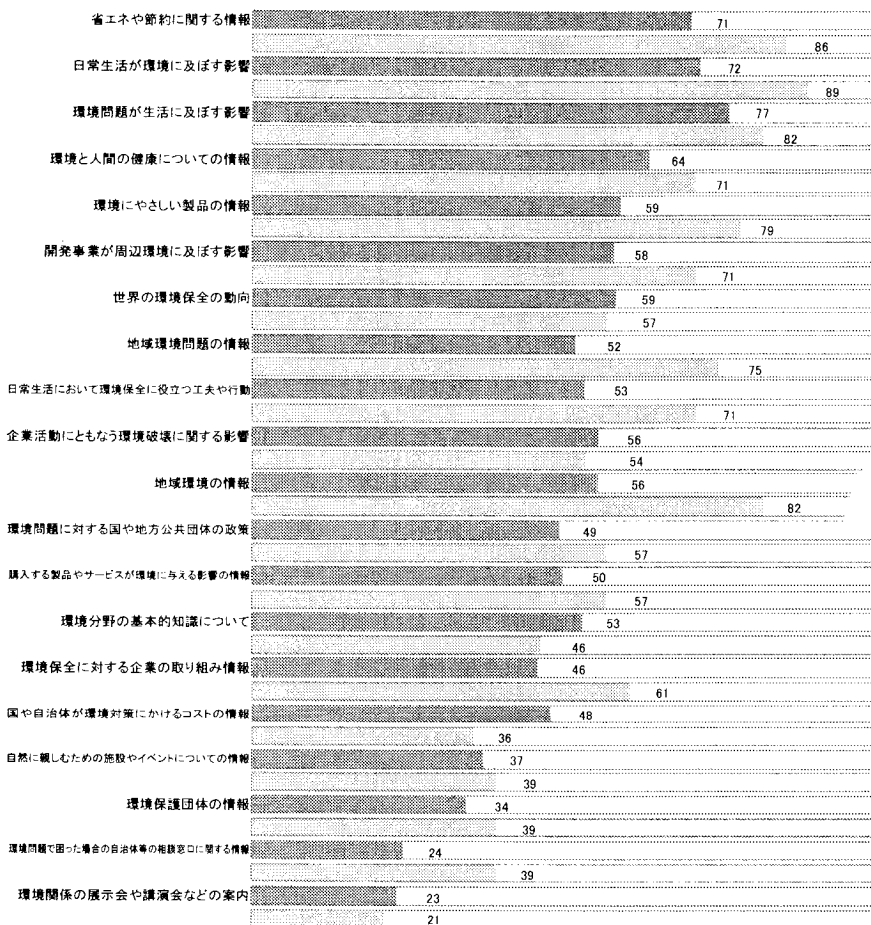


図7. 環境に関する情報への関心度（男女別）

立つ工夫や行動」18%、「日常生活が環境に及ぼす影響」17%、「省エネや節約に関する情報」15%、「開発事業が周辺環境に及ぼす影響」13%であることがわかった。男性の割合が女性より多い項目は「環境分野の基本的知識について」7%、「国や自治体が環境対策にけるコストの情報」6%であることがわかった。20項目中15項目が女性の環境に関する情報への関心度が男子を上回っていることがわかった。

## 5.2. 環境省の結果

図8に環境省の環境に関する情報への関心度についての結果を示す。環境省の調査では無回答の欄があるが、ここでは無回答の割合は無視し、それ以外の「大変関心がある」「やや関心がある」「あまり関心がない」「ほとんど関心がない」を基にグラフにした。また、棒グラフが表示されていない項目は、本調査に対応した項目が環境省の調査にはなかった項目である。なお図の右

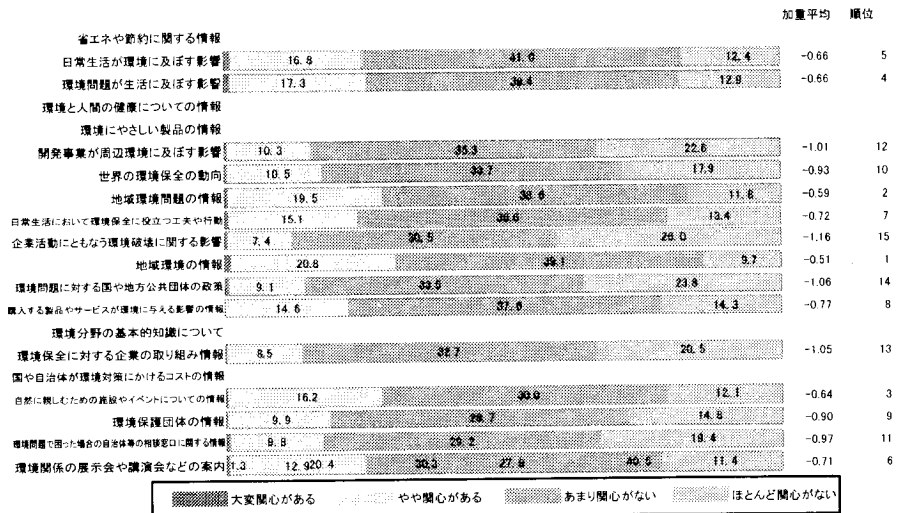


図8. 環境に関する情報への関心度（環境省の調査）

端に順位を記しているが、これは環境省の項目の中で本調査と同じ項目の加重平均の高い順に順位を付けたものである。

本調査の調査項目と環境省の調査項目が1対1で対応してないので比較はむずかしい。環境省の調査ではここで取り上げた項目の加重平均値はすべて負になっている。このことは「あまり関心がない」「ほとんど関心がない」人が多いことを意味している。ところが本調査の結果では20項目中14項目の加重平均値は正となっている。ということは福山大学生は全国平均と比べると環境の情報に関しては非常に関心度が高いということが言える。

全国では「地域環境の情報」に最も関心があるようであるが、福山大学生は11番目である。福山大学生は「省エネや節約に関する情報」に最も関心があるが、全国での調査がないので比較はできない。

「開発事業が周辺環境に及ぼす影響」は福山大学生では6番目であるが、全国では12番目になっている。周辺環境に開発事業が影響していると感じている学生が多いことがうかがえる。

## 6. 集計結果の概要(4)－環境問題の認知度－

問4は環境問題の認知度についての質問である。

### 6.1. 福山大学の結果

図9は環境問題の認知度を加重平均の大きい順に整理したものである。

図10は「大変よく知っている」と「やや知っている」の比率の合計値を積極的認知率とし、積極的認知率の大きい順に整理したものである。積極的入手率が70%以上の項目は「地球温暖化」91%、「オゾン層の破壊」81%、「大気汚染」75%、「水質汚濁」71%、「海洋の汚染」70%である。一方積極的認知率の小さい項目は「地盤沈下」44%、「土壌汚染」47%となっている。

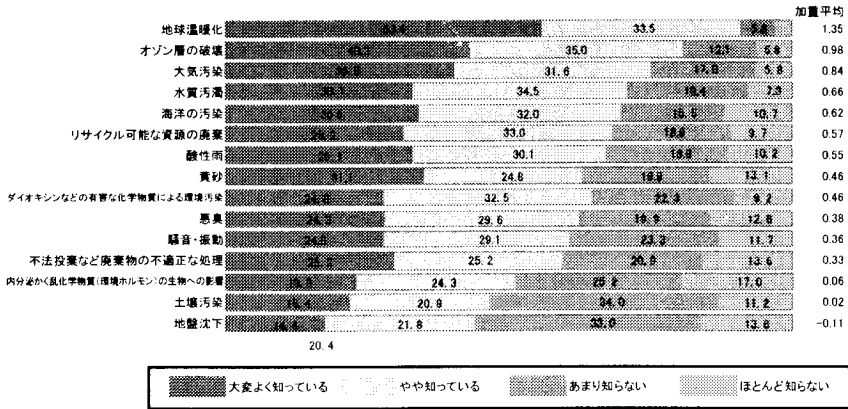


図 9. 環境問題の認知度

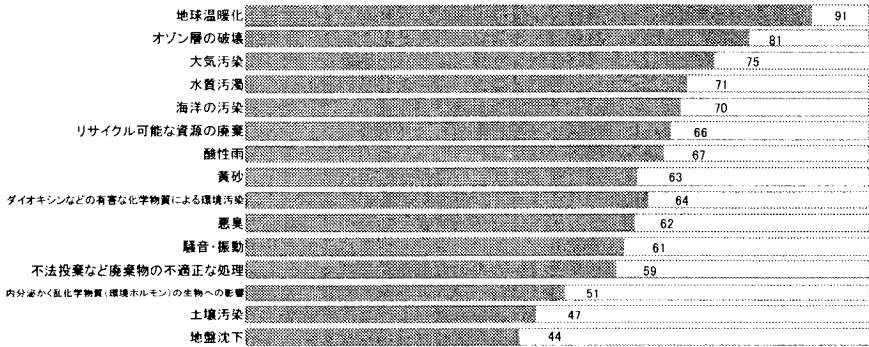


図 10. 環境問題の認知度 (積極的認知率)

15 項目中 13 項目が 50% 以上を示しており、環境問題に関してはかなり認知していると考えられる。

図 11 に環境問題の認知度の男女別の割合を整理した。各項目の上の段は男、下の段は女の割合を示している。

## 大学生の環境意識実態調査

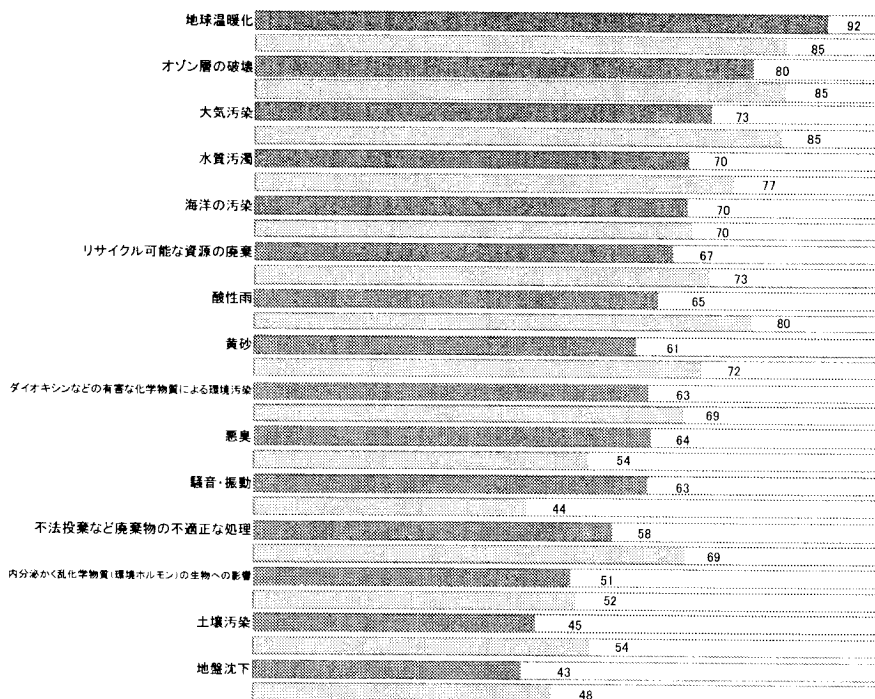


図 11. 環境問題の認知

女性の割合が男性より多い項目は「酸性雨」15%、「大気汚染」12%、「黄砂」11%、「不法投棄など廃棄物の不適正な処理」11%、「土壌汚染」9%である。15項目中13項目が女性の割合が男性よりも大きい、すなわち女性の方が男性よりも環境問題の認知度が高いことがわかった。男性の割合が女性より多い項目は「騒音・振動」19%、「悪臭」10%、「地球温暖化」7%である。

## 6.2. 環境省の結果

図 12 に環境問題の認知度に関する環境省のアンケート結果を記す。

「黄砂」に関する認知度は本調査では63%であるが、全国平均では12.0%

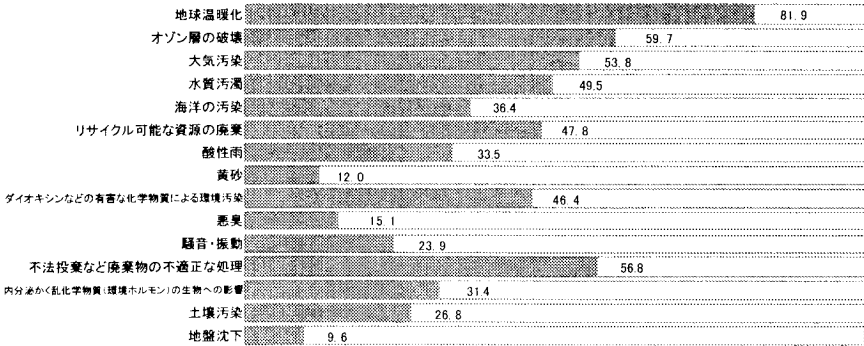


図 12. 環境問題の認知度（環境省の調査）

となっている。これは福山大学が位置している瀬戸内海地方特有のものであると考えられる。黄砂の影響を少なからず受けているがための結果であろう。また「不法投棄など廃棄物の不適正な処理」に関する認知度は本調査では59%、全国平均では56.8%となっている。ほぼ同じぐらいの認知度であることがわかった。

総務省の「平成19年度公害苦情調査」<sup>2)</sup>結果を図13に示す。大気汚染に関しては環境省の調査では認知度53.8%に対して苦情は25.7%、水質汚濁に関しては環境省の調査では認知度49.5%に対して苦情は10.2%、悪臭に関しては環境省の調査では認知度15.1%に対して苦情は14.5%となっている。大気汚染、水質汚染に関しては関心が高いものの苦情をいうほどでもないという人が半数近くいるようである。悪臭に関しては関心とともに苦情がほぼ同じ割合あり、悪臭に関しては我慢できないのが現状のようである。苦情件数は多くないものの、土壌汚染や地盤沈下に対する認知度はあることがわかった。

大学生の環境意識実態調査



図 13. 公害の種類別苦情件数

7. 集計結果の概要(5) - 環境問題に関する考え方 -

問 5 は環境問題に関する考え方を問うたものである。

図 14 は、環境問題に関する考え方を加重平均の大きい順に整理したものである。

この図は、環境問題に関する考え方を「大変そう思う」と「ややそう思う」の比率の合計値を積極的支持率としてその大きい順に整理したものである。支持率が 80% 以上の項目は「環境保全へは男女の差なく取り組むべきだ」84%、「地球環境問題解決には各国が協力すべきである」88%、「環境保全へは年齢の差なく取り組むべきだ」80%である。一方支持率が 50% 以下の項目

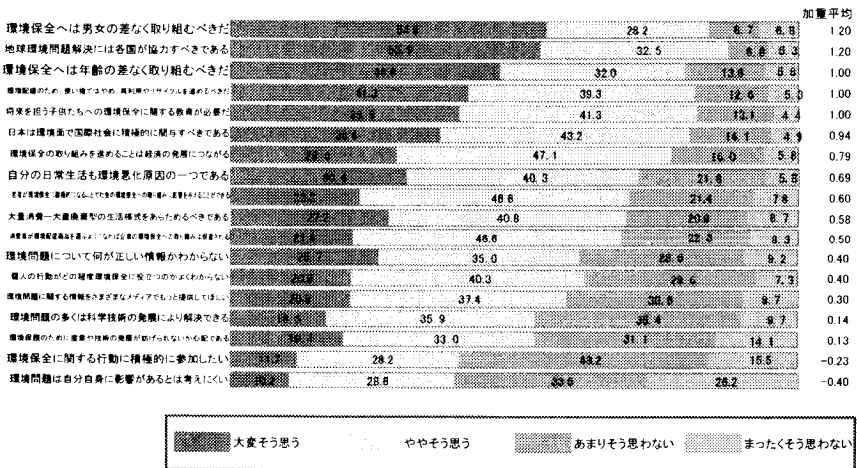


図 14. 環境問題に関する考え方



目は「環境問題は自分自身に影響があるとは考えにくい」39%、「環境保全に関する行動に積極的に参加したい」40%であることがわかった。環境問題に関しては関心があるものの、自分自身の問題としては考えられない学生がいるようである。

図16は環境問題に関する男女別の割合を整理したものである。各項目の上の段は男の、下の段は女の割合を示している。女性の割合が男性よりも10%多い項目は「自分の日常生活も環境悪化原因の一つである」16%、「環境保全へは年齢の差なく取り組むべきだ」15%、「環境保全へは男女の差なく取り組むべきだ」15%、「消費者が環境配慮商品を選ぶようになれば企業の環境保全への取り組みは促進される」12%、「地球環境問題解決には各国が協力すべきである」10%であることがわかった。

一方男性の割合が女性より多い項目は「環境問題は自分自身に影響があるとは考えにくい」12%、「個人の行動がどの程度環境保全に役立つのかよくわからない」6%であった。すなわち環境問題は自分の生活とは無縁であると考える男性の方が女性よりも多いことがわかった。

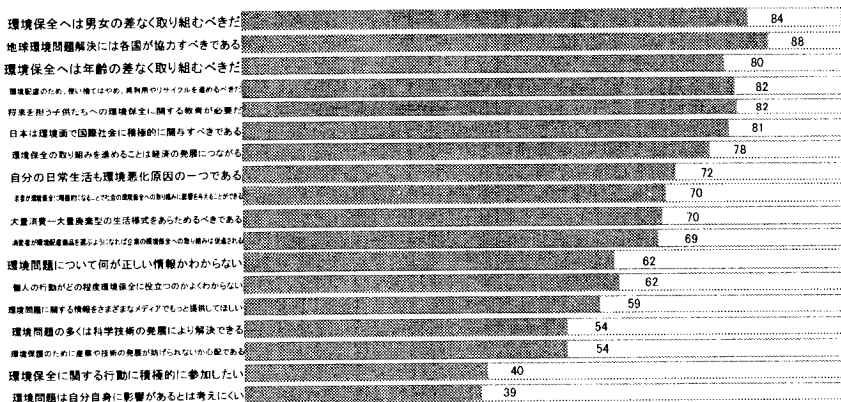


図15. 環境問題に関する考え方（積極的支持率）

# 大学生の環境意識実態調査

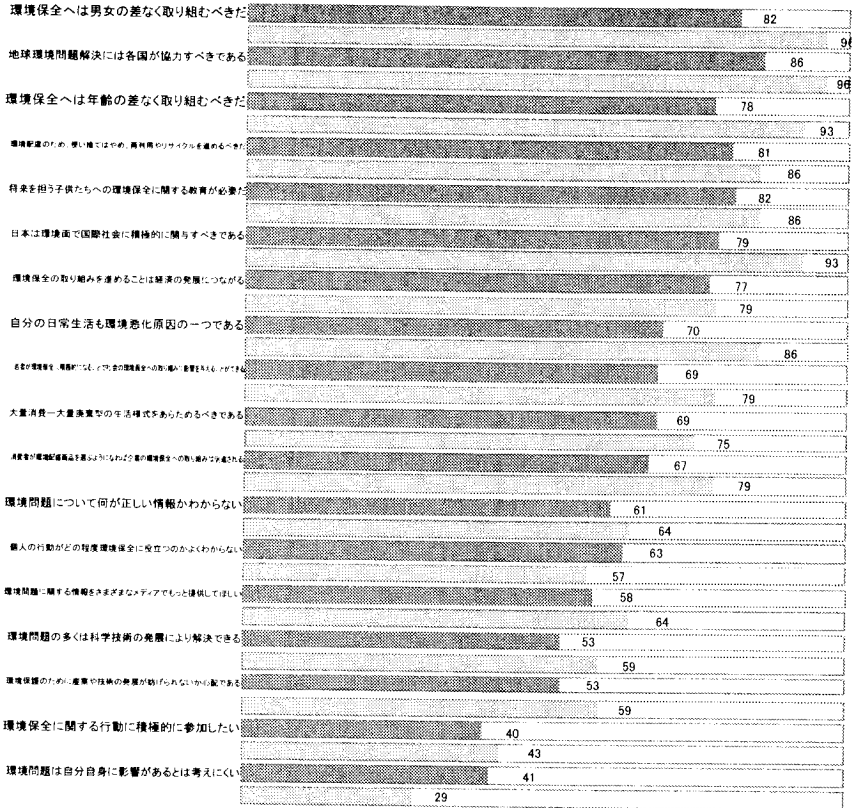


図 16. 環境問題に関する考え方（環境省）

## 8. 集計結果の概要 (6) - 環境保全に関する知識 -

問 6 は環境保全に関する知識を質問した。環境保全に関する知識を知っているものすべてを記述するよう設問したところ、次のような結果が得られた。

「リサイクル」8名、「ボランティア」4名、「節電」「節水」「アイドリングストップ」「太陽光発電」「植林」が各3名、「油を流さない」「洗剤をそのまま流さない」「節約」「冷房の温度を上げる」「エコバック使用」「ハイブリッドカーにする」

「風力発電」「フロンガスを減らす」「ポイ捨てしない」が各2名であった。以下に1名であった項目を列挙する。「携帯電話の回収」「粉せっけんを利用」「プラスチックのゴミは汚れを取って捨てる」「風呂水の利用」「もったいない運動」「食事を残さない」「イコロジー」「3R」「公共交通機関の利用」「エコカーの利用」「車で空ぶかしをしない」「急発進、急加速をしない」「なるべく車を利用しない」「川に海藻などの植物を植える」「一人ひとりが積極的に環境保全をするべき」「不法投棄をしない」「新聞紙を廃品回収に出す」「まぐろの捕獲規制」「ゴミの分別」「クールビズ」「長く大切な物を使う」「マイ箸を使う」

## 9. 集計結果の概要(7)－環境保全のための実践内容－

問7は環境保全のための実践内容を質問した。その結果「コンセントを抜く」が8名、「電気をちゃんと消す」が7名、「レジ袋を貰わない」「エアコンをできるだけ使わない」が6名、「自動車を使わない」が5名、「リサイクル」が4名、「自転車利用」「エコバック利用」「ゴミの分別」「扇風機利用」「公共交通機関の利用」「節水」「主電源を切る」「テレビを見ないときは消す」「エアコンに頼らない」「ゴミ拾い」「食べ物を残さない」が2名であった。以下に1名の項目を列挙する。「エコドライブ」「無駄なゴミを増やさない」「要らないものを買わない」「節約」「待機電力をなくす」「ボール型蛍光灯に交換」「照明は一番小さい物にする」「テレビは省エネモードで見る」「テレビは液晶にする」「電気製品にタイマーをセットする」「充電式乾電池の使用」「キャップとラベルの分別」「風呂水を洗濯に回す」「冷暖房を控える」「シャンプーは詰め替え用を使用」「食べ物を残さない」「ポイ捨てはしない」「永く物を使う」「環境にやさしい製品を使用」「何もしていない」と続いている。

環境意識の啓蒙活動の基に、もったいない精神を持ち、リサイクルを実行し、自然エネルギーを利用して環境への負荷を低減させる行動がめざしているようである。

## 10. 結論

本研究でアンケートの対象として福山大学経済学部1年生の環境全般に対しての認識度をまとめると次のようになる。

- (1) 環境に関する情報はテレビ、教科書、参考書、インターネットから入手する学生が多い。本学学生はインターネットから情報を得ている割合が全国平均と比べて顕著である。
- (2) 省エネや節約に関する情報、日常生活が環境に及ぼす影響、環境問題が生活に及ぼす影響に関する情報への関心が高い。
- (3) 地球温暖化、オゾン層の破壊、大気汚染、水質汚濁に関してはよく知っている。
- (4) 環境保全へは男女の差なく取り組むべきだ、地球環境問題解決には各国が協力すべきだある、環境保全へは年齢の差なく取り組むべきだと考える学生の割合が多い。
- (5) 環境保全のために、コンセントをこまめに抜く、電気をちゃんと消す、レジ袋を貰わない、エアコンをできるだけ使わない等の習慣が身につけている学生が多い。これから社会人になる学生の将来が明るいものを感じられる。

大学では、さらにいっそう環境に関心を持ち、積極的に環境問題に立ち向かっていくことができるような教育を実行していくべきであると考えます。

## 参考文献

- 1)「環境にやさしいライフスタイル実態調査」環境省
- 2)「公害の種類別苦情件数の推移」総務省統計局